
シンデレラ（前・後編小説）

淡雪ぼたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シンデレラ（前・後編小説）

【Nコード】

N5989T

【作者名】

淡雪ぼたん

【あらすじ】

『カクテル・バー』シリーズ第1弾”シンデレラ（カクテルの名前からイメージを膨らませて書いた小説です） / シンデレラストーリーに憧れて、会社の社長の御曹司と……。でも、それは最悪のロストバージンだった……。会社も辞め、心機一転し始めた春日に素敵な出会いが……。《携帯創作小説サイト フォレストより引越してきました。》

シンデレラ（前編）

今宵のカクテルのお話しは『シンデレラ』（ノンアルコール）

レシピは・・・。

- ・オレンジジュース1/3
- ・パイナップルジュース1/3
- ・レモンジュース1/3

これをシェークしてカクテルグラスにどうぞ・・・。

* * * * *

私の名前は 雛形春日（ひながた はるひ） 21歳、中堅文具メーカーの企画開発部の事務をしているOL。

私はシンデレラを夢見ていた・・・。
いつか王子様が私の目の前に現れて、永遠の愛を誓う。

地味で目立たなかつた灰かぶり姫は、美しいドレスときらびやかな宝石を身にまとい、美しく気高い姫に変身する・・・。
そして、継母や、意地悪な義理の姉達は悔しがって、そんなシンデレラを羨望の目で遠くから見ると・・・。

いつかきつと・・・。

そんなチャンスが訪れた・・・。
私の務める会社の跡取り息子・・・。

財前健也ざいぜんけんや 28歳が、企画開発部の企画部長として配属されて来た。
。。。

まだ20代なので、40代の上級管理職の中に混じっていると、少し浮いた様な、あどけない雰囲気はあるが、跡取り息子と言う事で、取り巻き連中がチャホヤして、腰を低くして媚びる。。。。王室のプリンスのような、光り輝いているようなオーラを感じる。背も高く、顔もまあまあ。。。。

でも。。。。

超地味で、特に取り柄もなく、万年雑用の私。。。。全然相手にされてない感じ。。。。
というか、逆に、怒られてばかり。。。。

「雛形さん!!」

うわっ。また不機嫌そうな財前部長の声か。。。。

「はい」

「このコピーはなんだ。曲って端は切れてて読めないし、順番がバラバラ。。。。こんな簡単な事も出来ないのか!!」

「はい。申し訳ありません。。。。やり直します」

「コピー用紙一枚だってお金がかかっているという事を分かっているのか？」

こう言う無駄な経費の積み重ねが、結構な額になるんだよ!! 何年この会社に務めてるんだ!!

もういい!! 浅田さん! このコピー頼むよ」

「はい」

あさだ ゆかり
浅田由佳里。

この会社のマドンナの私と同期入社ながら、気が利いて、ヨイシヨも上手くて、世渡り上手……。

上司からの受けも良く、それが評価に反映されていて、主任補佐を任されてる人……。

今日は、新しく赴任されてきた財前部長と、前部長の菅野部長の歓送迎会ということで、古民家を再生した内装の、オシャレな炉端料理の個室で開発部全員で飲み会が開かれていた。

幹事は浅田さんと雑用係に私……。

マドンナ的存在の浅田さんは、男性陣から引つ張りだこで、司会とか目立つ事専門……。

私は、飲み物や料理を注文手配したり、皆に配ったり……。雑用だ……。

「雛形さん、飲み物追加宜しく!!」

「はい」

店員が持って来たビールを配ろうとした時に、浅田さんがスツとやってきて、ビールを1瓶持っていた。

何処に行くのかと思ったら、財前部長の隣にさりげなく座ってこび売ってる……。

さすが世渡り上手……!

ふと見たら、前部長の菅野部長が寂しそうな感じでポツンとしていた。。。

皆、財前部長に媚売ってて、菅野部長を無視してる。。。。世の中こんなもんなんだ。。。。

菅野部長は、46歳で、厳しい所もあり、嫌っている人も居たが、私は結構好きな部長だった。

言っている事は当り前の事だし、評価してくれる所はキチンと評価してくれたし。。。。

あまり社長一族に媚を売るような、卑しい人ではなかった。

私はビール瓶を持って、菅野部長にビールを勧めた。

「部長、ビールいかがですか？」

「ああ、雛形くん、ありがとう」

「部長色々お世話になりました、ありがとうございました」

「雛形くんには色々ガミガミ怒ってばかりだったね」

「いえいえ。。。。私が気が利かなくて、御迷惑ばかりおかけしてたから。。。。」

「結構キツイ事言っただけだったが、雛形くんが人の嫌がるような小さな仕事も一生懸命やってくれて、縁の下の力持的な存在だった事は知っていたよ。

もつともつと成長してくれると思って、ちょっと厳しい事を言ってしまったが。。。。決して嫌って言ったわけではないからね」

「菅野部長。。。。」

「まあ、覚えは悪いし、ドジだし．．．。欠点も色々あるが、コツと頑張るその姿勢はとても評価できるから、これからも地道にコツコツと頑張るんだよ」

「部長．．．」

優しい部長の言葉に、感激して涙が出た。

「参ったなー。我ながら凄く良い事言ったと思ったけど、そんなに感動されちゃうとはねー！」

菅野部長は、照れ笑いした。

「私、嬉しいです。評価してくださり、あたたかく見守っていてくださってたなんて．．．」

「ちゃんと見てる人は見てるから．．．。もっと自分に自信持つんだぞ」

「はい」

その時だった．．．。

「なんか二人で話しが盛り上がってますねー」

「財前部長．．．」

ビール瓶を持って、財前部長がやってきて、春日の隣にさりげなく座った。

「菅野部長、色々お世話になりました。菅野部長程の人が他社に行かれてしまうのは本当に残念です」

「え？ 菅野部長お辞めになるのですか？」

「ああ。色々やりたい事があってね・・・」

「色々お世話になりました」

菅野部長が財前部長に深々と頭を下げた。

それから菅野部長は、他の男性社員に誘われて、カラオケの方に行つてしまい、私は財前部長と二人に・・・。

「雛形さんって名前が『春日』って言うんだよね」

「はい。あたたかい春一番が吹いた日に生まれたから、親がそう名付けたそうです」

「可愛い名前だね」

「えっ？」

そう言う事を言う部長は、普通の20代の男性のような部長らしくない感じがした・・・。

それからずっと部長は私の隣に座って、あれこれと他愛もない話題の話しを二人で話して、結構盛り上がっていたかもしれない・・・。こんな地味な私の事を、気に入ってくれたのだろうか？

その後2次会があり、3次会の話が男性社員の間で盛り上がっていたが、私はお先に失礼する事にした。

皆に挨拶をして、地下鉄の入り口に向かって歩いていたら後ろから声がした。

「雛形さん．．．」

振り返った財前部長だった．．．。

「財前部長．．．3次会に行かれましたか？」

「雛形さんが帰るって言うから、つまらなそうだしね？」

「えっ？」

「あの．．．良かったら二人でもう一件行かない？」

「あの．．．じゃあご一緒させていただきます」

大手ホテルの地下のオシャレなラウンジバーで、財前部長と一緒にカクテルを飲みながら．．．。
内心『うそーっ』と呟いた．．．。

社長の御曹司と私？！

ありえないでしょ？！

夢じゃないよね？！

「あの．．．どうして私なんかと．．．」

「雛形さんって素朴で可愛いなっと思ってたんだ．．．」

「え．．．」

「ねえ．．．今晚一緒に過ごさないか？」

内心どうしよう!!とあたふた焦ってしまった...。だって私、男性経験ゼロ...。バージンなのに...。だけど、こんなチャンスもう二度とないかもしれない...。皆の憧れの、プリンス的な財前部長とロマンス?!

一瞬戸惑ったけれど、私ははにかみながらコックリうなづいた。

初めての時って...。

あれこれ色々想像して、ドキドキしたものだった...。

経験はないけれど、財前部長は結構強引なタイプなのだろうか? ちよっとそんな気がした...。

全ての事が、彼のペースで進んでいく感じ...。私の事を気遣う感じでもなく、ただ自分の欲望を満たす感じに思えた。

痛みに耐えながら、きしむベッドの音を聞きながら、後悔の気持ちと、どうか早く終って欲しいって冷静に考えていた。時めきも何も感じなかった...。

そして終わった後に、シートについた初めての証を見て部長が言った言葉が忘れられなかった...。

「なんだよ。初めてだったんだ...。まさか責任とれだなんて言わないよね?」

凄くショックだったし、私ってなんて馬鹿な女なのだろうって思った。

最悪のロストバージン．．．。一生忘れない嫌な思い出になるだろう。

あれから社内でも、財前部長とはギクシヤクした感じで、何故か何かと因縁のような言いがかりをつけられて、叱られる事が多くて、社内虐めを受けてるようだった。

更にショックだったのは、1カ月もたたないうちに財前部長は、浅田さんと婚約した。

財前部長は私の存在がうつとおしくて、会社を早く辞めて欲しいと煽ってる事が分った。

そして私は会社を辞めて、派遣で大手の文具メーカー『株式会社KIBOU』に勤め始めた。

半年ぐらい過ぎた頃だろうか、風の噂で、財前部長と浅田さんはその後、財前部長の浮気が原因で、浅田さんは自殺未遂騒ぎを起し、婚約破棄となった事を知った。

財前部長は社内の女性に次々と声をかけて、食べ歩いていたようだった。

我が儘な社長の馬鹿息子だった訳だ。

財前部長との事は、最悪の思い出になったが、私は良いお勉強をした。

シンデレラストーリーなんて、そんな事は現実には滅多にありえない事だ．．．。

今私は、菅野部長の言った言葉を心に刻んで、地道にコツコツと頑張ってる。

* * * * *

- - - 朝の通勤時間帯

「いけない．．．。急がないと遅刻しちゃう．．．。」

発車のベルの鳴るホームの階段を駆け降りて、滑り込むように私は電車に飛び込んだ。

「すみません！！ 乗ります。 乗ります」

物凄い勢いで飛び込んだら、電車の扉が閉まった。

「ギリギリセーフだった．．．。」

ほっとしたのもつかの間．．．。

私は『ヤバイ！！』と思った．．．。

あまりにも勢い良く飛び込んだので、目の前の男性のYシャツに口が当たって、キスマークをつけてしまった．．．。

しかも．．．。可愛いおちよぼ口のキスマークならまだ見れるかもしれないけれど、馬鹿みたいにガバツと口を開いた形．．．。

まるでブラックホールに吸い込まれるような不気味さだ．．．。これを見たら100年の恋も冷めそうな感じだ．．．。

どうしようかなと思ったけれど、意を決して謝る事にした。

「あ．．．あの．．．。」

背の高い人だったので、電車も混んでたし胸元しか見えなかったが見上げて顔を見たら、凄く素敵な人だった。

鼻筋が通って、サラサラのサイドから流した前髪がエレガントな感じのサイドムーブショットヘアがとっても似あう、35歳ぐらいの

人．．．。

バリバリ仕事も出来そう．．．。
切れ長の奥二重の目が澄んでいて優しそう．．．。

その人が私の顔を見て、ハツとした顔をした。

この驚愕しそうなＹシャツについた口紅を見て怒ったのかな？

「すみません。Ｙシャツに口紅付けてしまいました。
本当に申し訳ありません」

そう言った途端に、その人が口を開いた。

「君．．．鼻血．．．」

「えっ？」

そう言って鼻を押さえたら、手に真っ赤な血がついて驚愕した。
「うそーっ」

「大丈夫？ 良かったらこれを．．．」

ポケットからポケットティッシュを出して、渡してくれた。

「さっき駅前で配っているのを貰った物んだけどね」

「あ．．．ありがとうございます」

「凄い出血してるみたいだけど．．．。電車を降りて休んだほうが
いいんじゃない？」

「でも．．．会社遅刻しちゃうかもしれませんし．．．」

「きみうちの会社の社章胸につけてるけど、KIBOUの人？」

「え？ KIBOUの社の方ですか？」

「うん」

「私、派遣だから、あまり遅刻とかするとクビになっちゃう可能性もあるし・・・」

「僕がそうならないように話してあげるから、休んだほうが良いよ」
親切にもその人は、混んでいた電車の中、私をかばうようにサポートしてくれて降ろしてくれた。
そしてその人も一緒に降りて付き添ってくださった。

「あの・・・本当にすみません」

「ちょっと待ってて、そのベンチに座って休んでいて！」
そう言っただけの人は、何処かに消えていった。
そして暫くしたら、戻って来て、濡らした自分のハンカチを差し出した。

「これで冷やしたほうが良いよ」

「何から何まで、本当にすみません。」

あの・・・Yシャツですが・・・」

「ああ、これ、気にしなくて良いよ。会社に替えのYシャツが置いてあるし・・・」

「クリーニング代お支払いさせてください。落ちるかしら・・・」

「そんな気にしなくて良いから。きみからクリーニング代もらった

やったら、僕も治療費払わなくちゃいけなくなりそうだ．．．」

「え？」

「だって、僕の体に勢い良くぶつかって、鼻血出しちゃったんでしょ？」

「これは自爆ですから．．．。私が全部悪いんですから．．．。本当に．．．。綺麗なお高そうなYシャツにブラックホールを付けてしまつて．．．。」

「シユンとする私．．．。」

「ブラックホール?!」

「だって、可愛いおちょぼ口のキスマークならまだしも、これは宇宙のエイリアンの口って感じですよ。あるいはブラックホール．．．。吸い込まれたら死ぬぞ!大変つて．．．。」

目が点のその人を見て、余計な事をベラベラ喋りすぎたと思つて更に落ち込んだ。

その時だつた．．．。

『ブツ!』と吹いて、腹を抱えながら笑い出した。

「確かにこれは．．．。僕が思うのに、これは『ま』の形だと思つよ」

「『ま』の口?!」

今度は私の方が目が点になる。

「のりますの『ま』．．．。大きな声でそう叫んでたからね」

「たしかに・・・」

そうこうしているうちに鼻血も止まり、一緒に社まで行く事になった。

「そつだ！ きみの部署と名前は？」

「企画開発部 1課 庶務係 の、 雛形 春日です」

「はるひちゃん？」

「温かい春一番の風が吹いた日に生まれたそうぞ、春の日と書いてはるひと言います」

「へえ、素敵な名前だね・・・」

「あの、あなたは？」

「僕？ そのうち会うと思うから・・・。じゃあ」

そう言つて、あの人は社のセキュリティゲートから、社員証カードをサツと翳して、スツと入つて、あつという間に消えていった。

警備員の人が、丁寧に挨拶していたから、きつと上級管理職の人なんだわ・・・。

私は上司から怒られるかなと、ビクつきながら職場に行ったが、意外にも何も言われずに澄んだ・・・。

それに、遅刻もつかなかった・・・。

きつとあの人のお陰ね・・・。

それから数日して、驚く事が起きた。

上司から呼び出されて、クビ！と言われるか、何か怒られるのか、悪い話しかないとビクつきながら、上司の部屋に行ったら、正社員採用したいと話しを持ちかけられた・・・。

私はもちろん即答では是非よろしくお願い致しますとお願いしたが、何で？

その答えは、すぐに分かった・・・。

今までは派遣だったので、入れる場所と入れない場所があり、毎週水曜日に大ホールで行われる合同朝礼には参加しなかったが・・・。社員となって、初めて参加する事になった。

社長が現れて、挨拶をする。

一目見て固まった・・・。

私がYシャツにブラックホール・キスマークを付けてしまった人だった・・・。

社長の名前は、かなづき神流月嶺二れいじ 35歳、小さな企業から、ここまで社を大きくさせた、凄い人。

時の人として、経済誌にも良く掲載される・・・。

なんて愚かな私・・・。

何で気付かなかったんだろう・・・。

何処かで見たとような感じはしてたけど・・・。

血の気が引いた・・・。

あんな失礼な事しかして・・・。

物凄く落ち込んだ．．．。

恥ずかしすぎて、もう顔も合わせたくない．．．。
合わせられない．．．。

あれから私は1本早めの電車に乗って、社長に会わないように気をつけた。

早めに会社に着くので、職場の掃除と、みんなの机の雑巾掛けやお茶の用意を率先してやった。

だって、社長のお情けで中途採用された、言ってみれば裏口入社みたいな物なもの．．．。

ばつが悪いって言うか．．．。やましい気持ちって言うか．．．。

コピーだって、電話番号だって、雑用何でも引き受けますって思った。それから前の会社にいた頃のように、へましないように細心の注意を払って、それから、社に関係ありそうな事や、必要そうな事項などは、必死に勉強した。

それから3カ月．．．。

その甲斐あってか、職場のみんなからは「ひなちゃん」と呼ばれ、可愛がってもらえた。

「ひなちゃん、急ぎの物なんだけど、データ入力お願い出来るかな？」

課長が、愛想笑いを浮かべながら、書類の束を持って来た。

「はい！大丈夫です！！」

皆から、頼りにされて、何でも引き受けて．．．。
だけど最近ちょっと疲れモード．．．。

だって、毎日残業が．．．。

「今日も残業だ．．．」

気がつけば、職場の皆は帰ってしまい、ポツンと1人だった．．．。電気が勿体ないので、自分の所だけ付けて仕事するとちょっと不気味．．．。

「夜の社は静かで、暗くて、なんだか薄気味悪いわ．．．」
「やっと入力が終わって、フロッピィに落として、課長の机の上に提出．．．」

「終わったー」

時計を見たら、10時．．．。

「早く帰ろう．．．」

走ったら、電車に間に合いそうだった．．．。

セキュリティゲートを走りながらカードを翳して通り抜ける．．．。その時だった．．．。

ゲートは通り抜けられたのに、持っていた傘が引っ掛かって、からだが後ろに押し戻されて、派手にしりもちを付いた．．．。

警備員がびつくりして、駆け寄ってくる。

「だ．．．大丈夫ですか？」

「ハ．．．ハイ。すみません」

苦笑いしながら、すつくと立ち上がり、何事もない顔をして歩き始めた。

あまりにも恥ずかしいので、早歩きして社を出て、社を出た後で、側にあつたベンチに腰かけた。

「あいたたた．．．」

あの時は気を張っていたが、後から激痛が襲ってくる。

酷く腰を打つたので、血の気が引いてきた。
少し休んでから、帰ろう……。
どうせ、電車乗り遅れたし……。

その時だった。

「大丈夫？」

痛みを堪えて顔を上げたら『ゲゲゲッ！』社長だった……。

「社長……」

「さつき遠くから勢い良く転んだ君の姿を見かけて、慌ててすっ飛んできたんだが……」

「は……はい。大丈夫ですので……」

「その顔は大丈夫そうに見えないけど……」

「この通り、大丈夫ですので……」
すつくと立ち上がって元氣ぶつた。

でも、それが悪かったみたいで、いきなり立ち上がったので、脳貧血を起し、座り込んだ。

「す……すみません。急に血の気が引いてきました」

「社に戻って、少し休憩した方がいいんじゃないの？」

「いえいえ……。もう恥ずかしすぎて、はいつくばる様にごりまで来たので……」

「うーん。でも何処か怪我したんじゃないの？ 病院行った方が良いよ」

「い．．いいです。大丈夫」

「社長命令だ。病院行きなさい」

そう言つて、いきなり抱き上げられた。

「お．．降ろしてください．．」

「すぐ近くに病院があるから、連れて行ってあげるよ」

抱き上げられて病院に連れて行かれて、もう顔から火が出まくる感じだった。

病院で見てもらつたら、骨には異常なく、強い打撲で、痛み止めと湿布薬をもらつた。

暫くお尻が青黒い痣になるようだ．．。

痛みが引くまで病院のベッドで休んでいきなさいと言われ、今はベッドに横になっている状態だ。

私つていつもなんでタイミング悪いのか．．。

「あのお．．。また御迷惑おかけしてすみません」

「僕は嬉しいんだけど．．」

「え？」

「あれから一度も会えないし．．。もしかして避けてるのかな？」

「すみません。実は社長と知ってから、あまりにも失礼な事をしで

かして、醜態をさらして、とても顔を合わせられる状況じゃなかったの……」

「気にしないでよ。それに君の事が気になってさ……」

「その……一目惚れって言うのか……」

「ええええっ」

あまりにも突然の事で、何も答えられなかった。

「誰かつきあっている人は居るのかな？」

「いません」

「よかったら、付き合ってくれないかな？」

「あまりにも突然で……」

「嫌かな？」

「いいえ。とても素敵な優しい方で良い方だなって思っていましたか……。突然過ぎてどう答えていいのか」

「フリーの身で、僕に好意を持ってきているのなら、付き合っ
て欲しいな」

「はい」

「オツケ？」

「じゃあ、よろしく願います」

内心信じられなかった・・・。

社長とお付き合い？ うそでしょう？？

それから1カ月が過ぎた・・・。

初めて社長のお宅に遊びに行った。

高級マンションの最上階。

広々とした高級感漂う5LDK、まるで空中庭園の様な、芝生が張りつめられ、木や花も植えられている、広いルーフバルコニーもついでいて、ガーデンパーティーも出来そう・・・。

前々から誘われはしていたけれど、すつ転んでお尻に大痣があるし、万が一の時恥ずかしすぎて・・・。そんな事考えられなかった・・・。

「今日は泊まっていけない？」

「えっ？」

「嫌かな？」

前の会社の社長の事がトラウマになっていたけれど・・・。

嶺二さんは、そんな軽い人じゃなさそう・・・。

暫く考えててたけれど、はにかみながら彼の誘いを受け入れる事にした。

(後編に続く)

シンデレラ（後編）

社長の家の高級そうなベッドは、キングサイズ．．．。
広くてふかふかで、洗いざらしのシーツが心地良くて．．．。
部屋もキッチンと整理されてて綺麗だし．．．。男の一人暮らしと言
う感じがしない．．．。

身の回りの世話をしてくれる人でも居るのだろうか？

それにこの広いベッド．．．ここにいつも1人で寝てるの？

それとも癒してくれる女性がいるのかな？

深く考えると不安な気持ちが次々と沸き上ってくるが、社長の事を好きと言う気持ちの方が勝ってて、自分の中の理性や倫理観が麻痺してしまう。

昔のようにシンデレラストoryには憧れなくなっただけ、多分社長だからじゃなくて、彼の人柄その他彼の全てに魅かれてしまってるんだらうなと思った。

もしかしたら私．．．。

また愚かで馬鹿な女になってしまふのかもしれないけれど．．．。

それでもいい．．．そう思った。

今は馬鹿な女を選びたい。

最悪のロストバージンだったあの時は、苦痛しか感じなかったけれど、嶺二さんとは違っていた。

ふわりと抱きしめられただけで、心の奥の奥にある芯がポツと火を灯し、その熱が全身にジワジワと広がって心地良くなるのを感じた。

甘い時間に誘われて、夢のような時を過ごし、春日は嶺二の腕の中

でウトウトと眠りに付いてしまった。
暫くして、目覚めると、優しく愛おしそうに微笑みながら、春日を
見つめる嶺二と目があつた。

「社長．．．恥ずかしい．．．。ずっと見てたのですか？」

「社長はやめてよ。名前で呼んでほしいな」

「じゃ．．．嶺二さん。恥ずかしい」

「だって可愛いから．．．」

「嶺二さん」

「愛してるよ．．．」

「私も．．．愛してます」

* * * * *

それからは、朝の通勤は、いつも同じ電車の同じ車両に乗って、お喋りを楽しんだり、車内が混雑してくると嶺二さんがかばうように抱きしめてくれて、守ってもらいながら、お互いのぬくもりを感じあつたり．．．。

駅に着いたらお互いに、スーツと離れて、別々にセキュリティゲートを通つて．．．。

社内の廊下ですれ違う時は、秘密のサインを送り合つたり．．．。秘めやかなオフィスラブを楽しんだりした。

まさか社長の彼女が私だとは誰も気づかないだろうな．．．。

ちよっぴりスリリングで楽しい．．．。

と言っても、仕事は手を抜かないでキチンとこなしていたし、変わらずに人一倍一生懸命働いた。

3カ月後、その甲斐あつてか、異例のスピード昇進で、主任を任せられ、後輩の育成にも当るようになっていた。

ドジで失敗の多い子の気持ちは良く分かっているから、気長に責めないで、その子のいい点を伸ばす様に努めて、良い先輩として後輩からも好かれた。

「あ．．．吾妻君、ファックス？」

いつの間にか魅力的なキャリアウーマンに変貌した春日。

「あ．．．、はい」

「ちよつと見せて」

パラパラと書類を確認．．．。

「あ．．．やつぱり．．．。重要書類が紛れ込んで．．．。このままファックスしちゃったら、社内機密が他社に送られちゃう所だったよ」

「うわっ。俺ってどうしてこうなんだろう．．．」

「大丈夫！ 私ね、凄くドジでノロマで怒られてばかりだったんだよ。

コピーすれば曲つてて読めないし、順番もバラバラで．．．。でもね、努力すれば認めてもらえるし、評価されるから、諦めないで頑張つてね」

「はいっ」

「吾妻君、ファイト！」

ガッツポーズをしながら、主任室に消えて行く春日。

その後ろ姿を見て、憧れの目で見る吾妻と新入社員の同期達……。

「先輩ってカッコいいですね」

「本当だよね……」

春日は充実した毎日を送っていた。

そんなある日の事……。

朝の通勤、今日は嶺二さんは出張で、1人で通勤。

セキュリティゲートを通過しようとした時だった……。

受け付けで何やらもめていた。

綺麗な女性が、受付嬢と口げんかの様にもめている。

一方的にその女性が、喚いていると言ったほうが正しいが……。

春日は側にいた、同じ課の上司（課長）でもある、女性の先輩に聞いた。

「あの……どうされたのですか？」

「あの、確か社長の奥様よ。前に創立記念パーティーで見かけた事があるわ」

「ええっ」

社長って結婚していたの？！

騙された！！って思った。

前回よりも今回の方がはるかにダメージが大きい……。

もしかして、自分に都合の良い、適当な女が見つかったと思って、自分の手元に置いておこうと思って、派遣だった私を社員にして、この会社に置いたのだろうか？

一度疑い出すと止めどなく疑いの気持ちがあふれ出す。

社長の部屋が綺麗に整理整頓されていたのは、奥さんがいたから？

奥さんと愛しあってるベッドで、私は社長に愛されたの？

想像したら寒気がして来た。

私ってつくづく愚かな馬鹿な女だわ。

遊ばれやすい、軽い、男に都合の良い女なんだ。

女性には本命と、使い捨てのような遊ぶ女の2種類が存在する。

私は使い捨ての都合の良い女……。

悪い事は続くもので、来るべきものが来ない……。

嶺二さんはいつも気を使ってくれていたのに……。時にはミスしてしまふ事も起きてしまふ……。

勇気を振り絞って、薬局でテストを買って、調べてみた。

家に帰って調べて物凄くショックを受けた……。

妊娠反応が……。

どうしよう……どうすればいいんだろう……。

私って本当に馬鹿な女……。

つわりも激しくなってきた、最近物が食べれないし、匂いにも敏感になってしまって、辛い……。

やけに眠くて体が怠くて……。

「先輩、目の下にクマできてませんか？」

吾妻君が心配顔で顔を覗き込む。

「最近元気なさそうですが、何処が悪いんじゃあ……。」

「ごめんごめん……。ちょっと疲れがたまってるのかなあ」

「俺に出来る仕事がありましたら何でも言ってください。やりますから……。」

「どうもありがとう。心配かけちゃってごめんね」

嶺二さんに妊娠したって言うたら、おろして欲しいってきつと言っよね。

裏切られても好きな人の子供……。

生みたいけど、私1人じゃ育てられないし、奥さんが会社にやって来てもめていたって事は、愛人の事知って、殴り込みに来たのかも……。

会社をやめなくてはいけないかもしれない……。

奥さんの存在を知ってから、私はまた電車を変えて、嶺二さんにあわないようにした。

メールが来ても、電話がきても、出ない様にして……。

社内でもあわないように気をつけた。

合同朝礼の時は、しょうがないから遠目に顔を合わすが、他の社員
の人の陰に隠れて、なるべく目を合わせないように気をつけた。

でも、こんな逃げ隠れして、嶺二さんが放っておくはずがない。
残業で遅くなった帰り道、待ち伏せされた。

「春日!!」

「社長!!」

逃げようとしたけれど、腕をつかまれて捕まえられた。

「最近なんで僕を避けてるんだ!!」

「社長ご結婚されてたのですね」

「言わなくて悪かったよ。結婚してた」

「奥様がいるのに・・・私の事は遊びだったのですね」

「違うよ。大切に思ってるし、真剣に愛してるんだ」

その後、嶺二さんが、何やら一生懸命喋っていたけれど、吐き気が
襲ってきて、だんだん込み上げてきてそれを押さえようと必死で耳
に入らなかった。

もう喉の所まで上がってきて『ヤバイ!』と思った。

「ねえ、僕の話し聞いてる?」

彼が私の肩を掴んで揺るので、限界に達してた。

ハンカチで口を押さえて、座り込んで、そばにあった植え込みにもどってしまった。

「春日！！ 具合が悪いの?!」

「私、赤ちゃんができちゃいました」

私は覚悟した、おろしてくれって言っただろう・・・。

「やった！！ バンザイ!!!」

「えっ?」

思わぬ彼の反応に目が点状態・・・。

「結婚しよう。式は後にするとして、すぐ入籍しよう」

「はあ?」

「『はあ』じゃないでしょう? まさか結婚しないつもり? 生まないつもり?」

「いえ・・・だって奥さんが・・・」

「全くさっきの話を聞いてなかったね! 彼女は離婚した元妻、俺はバツイチで黙ってて悪かったって言ったの聞いていた?」

「ええっ?」

「聞いてなかったね。だからなにも問題は無いし、僕と結婚して欲しい」

「……………」

「イエス or ノー？」

「イ・イエス……。」

彼がキスして来ようとしたので、慌ててハンカチで口を押さえた。
「ダ・ダメです。今、もどしたばかりなんだから……。」

「そんなの構わないのに……。」

「嫌です」

「ちえつ。 そのベンチに腰かけてて……。」

暫くしたら、彼がミネラルウォーターを買ってきてくれた。
そして、ぬらしたハンカチも……。

あの、鼻血騒ぎの事を思い出す。

あの時もハンカチを濡らして、そっと手渡してくれたっけ。

「これで額を冷やしたら、少しは気分が良くなるんじゃないかな」
優しくハンカチを差し出す彼が愛おしい……。

「君のご両親に挨拶に行かなくちゃいけないし……。忙しくなる
な……。妊娠の事怒られるかな？」

「大丈夫ですよ。多分……。」

苦笑して頭を掻くその姿が青年っぽい……。

私は幸せなシンデレラ．．．。
12時を過ぎて魔法は解けない．．．。
ふとそんな言葉が頭に浮かんだ．．．。

* * * * *

．．．それから2年後

あれから私はつわりが酷くて、仕事を続ける事ができなくて断念、
寿退社した。

そして入籍、結婚、元気な男の子を出産した。

旦那様によく似てて、とても元気．．．。

前の結婚では奥さんが子供嫌いで、子供を作りたがらなかったそう
で、実は、ずっと欲しかったらしく、息子の事をとても可愛がって
くれる、子煩悩なパパに変身した。

もちろん変わらず私にもとっても優しい．．．。

あの日会社の受け付けに、別れた奥さんがやってきたのは、お金の
無心に現れたのだった．．．。

結婚当時、会社が急成長して超多忙だった嶺二さんは、あまり奥様
の事を構ってあげられない生活が続き、淋しさを紛らわす為に、買
い物依存症になってしまって、ホスト遊びにも興じ、家庭が崩壊し
た．．．。

可愛そうな所もある人だ．．．。

生活に困らないように、結婚の頃住んでいた家は、奥様に譲り、生
活に困らないぐらいのお金も渡したそうだが、湯水のように使い果
たしてしまったらしい．．．。

今、住んでいるマンションは、離婚後購入したマンションで、あの家に恋人的な女性を入れたのは、私が最初で最後だったそうだ。家が綺麗だったのは、高級マンション特有のコンシエルジュエサービスがあり、衣類やシーツなどのクリーニングやハウスクリーニング、デリバリーサービスなど、ホテル並に色々頼めるからだった．．．。もちろん嶺二さんがキッチンとした人ということもあるが．．．。

今日はベビーシッターに子供を預け、文具関係の経営者交流パーティーに嶺二さんと参加している。

そこで、パツタリと、最悪なロストバージンの相手、財前部長にあった。

私が見違えるように綺麗になったとかで、かなり驚いていた。そして嶺二さんに意味深に嫌みを言った。

「彼女の初めての相手は僕だったんですよ．．．」

なんてサイテーな男だと思っただけで、嶺二さんには何もかも話してあったので、サラリと受け流し、嶺二さんはこう言った。

「こんな素敵な女性を手放してしまって残念でしたね。私はラッキ―だったか．．．。」

財前部長は『チツ』と舌打ちして、消えていった。

その後に嶺二さんがこう言った。

「ちよつと残念だったな．．．。もう少し早く出会っていたら、君の全ては僕ものもだったのに．．．。」

だから私もこう言った。

「私も、嶺二さんにあげたかったな」

嬉しそうに嶺二さんがこう言った。

「でも、是から後はずっと君は僕の物だね」

私はこう言った。

「この先ずっとね！」

今日も、明日も・・・。この先ずっと・・・。
私は幸せだなんて思う・・・。

・・・完・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5989t/>

シンデレラ（前・後編小説）

2011年6月15日12時41分発行